歓喜の歌と友愛の花

――現代によみがえる大正時代の市民オーケストラ――

南川慶二（みながわ　けいじ）（徳島大学ＳＴＳ研究部准教授）

第九のふるさと

平成二四年秋、全国初の同一県二度目の国民文化祭が徳島県で盛大に開催されました。この国文祭では徳島県の文化に関係する四つのモチーフが設定され、多岐にわたる芸術や文化を存分に楽しみました。その四つのモチーフは、阿波藍、阿波人形浄瑠璃、阿波踊り、そして、ベートーベンの交響曲第九番です。三つの伝統文化に混じって一見場違いなベートーベンの音楽が含まれているのはなぜでしょうか。ご存知の方も多いと思いますが、徳島県は一〇〇年近く前の大正時代に「第九」が日本で初めて演奏された場所であり、それを記念しているためです。

日本初演を行ったのは、第一次世界大戦の捕虜として徳島県板野郡板東町（現在の鳴門市大麻町板東）の板東俘虜収容所に収容されたドイツ兵たちでした。初演が大正七年（一九一八年）六月一日であったことにちなみ、徳島県では第九と言えば年末ではなく六月第一日曜の「鳴門の第九」です。この「第九のふるさと」の演奏会は三〇年以上続いており、全国各地の第九を歌う会有志ら数百人が集い、大合唱で熱演を繰り広げます。

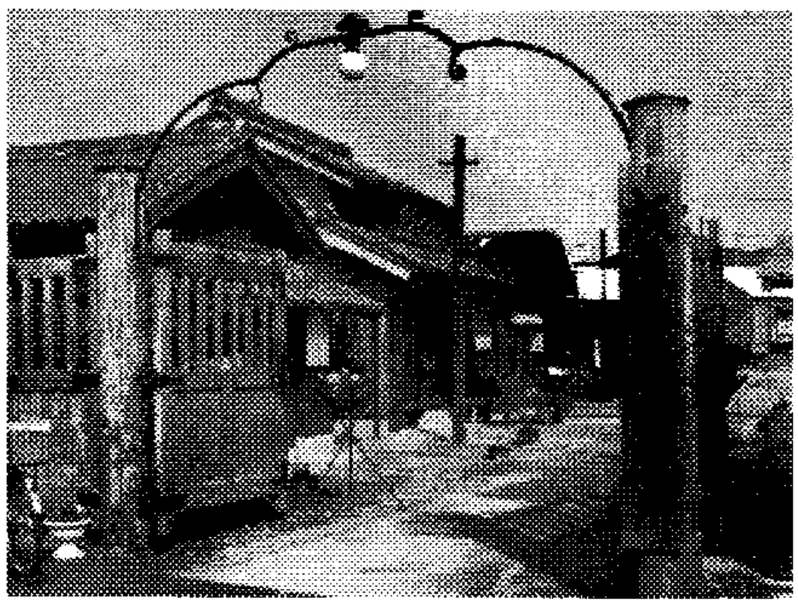
筆者は初めて徳島で暮らした学生時代には学業そっちのけで合唱三昧の日々を過ごしましたが、鳴門の第九の意味は理解したものの、聴いて楽しむ程度でした。卒業して数年後に母校に職を得て徳島に戻り、誘われて参加した「徳島エンゲル楽団」に関わるうちに、大正時代に徳島で行われたドイツ兵捕虜の音楽活動に興味を持つようになりました。

本稿では、第九の日本初演に関わる背景や、ドイツと徳島との交流復活の経緯と、そのシンボルとなった第九という曲の持つ意味などを述べた後、「鳴門の第九」の華々しさの影に隠れがちな市民レベルの友好の歴史を伝える徳島エンゲル楽団の活動を紹介します。

ドイツさん

一九一四年に勃発した第一次世界大戦で、日本は中国のドイツ租借地青島を攻撃し、短期間で陥落させました。捕虜となったドイツ兵たちの収容所の一つが現在の徳島県庁付近の議事堂を転用した徳島俘虜収容所で、同年十二月から二〇〇人あまりの捕虜が暮らしました。四国には他に松山と丸亀にも収容所がありましたが、これらも寺院を転用した不十分な施設であったことから、三つの収容所が板東俘虜収容所に統合移転され、一九一七年四月から約三年間、千人近いドイツ兵が板東で生活しました。

捕虜は軍人のほかに学者や職人など専門知識や技術を持つ民間人も多く、先進国ドイツの技術や文化がもたらされました。徳島の人々はドイツ兵たちを親しみを込めて「ドイツさん」と呼びました。四国では八十八カ所霊場を巡礼するお遍路さんに食物や宿を無償で提供するお接待の風習が今も残っていることが示すように、見知らぬ人を温かくもてなす文化があります。それに加え、徳島および板東で収容所長を務めた松江豊寿大佐が「武



板東俘虜収容所を再現した映画セットの展示施設「阿波大正浪漫バルトの庭」

士の情け」の精神で捕虜に最大限の自由な活動を認めたことが戦時下での希有な友好関係をもたらしました。

トクシマ・オーケストラ

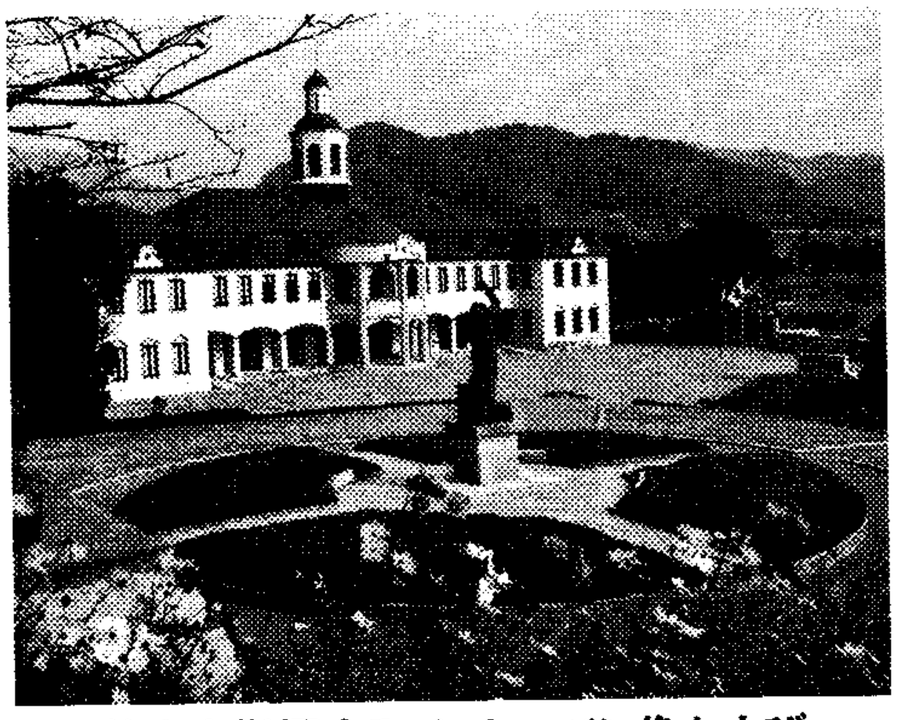
捕虜となって徳島に移送された二〇〇人あまりのドイツ兵たちの中に、軍楽隊を率いるヘルマン・ハンゼンという音楽家がいました。彼が後に板東で第九の日本初演を指揮することになりますが、徳島収容所時代の早い時期から既に楽団を作って活動を始めていました。そのきっかけは、捕虜の一人がギターを発注したところ、西洋楽器を見たこともない楽器商が間違ってチェロを持って来たことに始まります。元からバイオリンがいくつかあったことから、チェロを加えて楽団を作ろうという話になり、足りない楽器を調達して「徳島オーケストラ」が編成されました。楽譜はハンゼンがピアノ譜を元に編曲したり、時には記憶を頼りに一から作ったりしました。徳島収容所での二年半の間に五〇回もの演奏会が行われました。マーチやワルツなどのほか、大曲としては、ベートーベンのバイオリン協奏曲がハンゼンの独奏で日本初演されました。第九の「歓喜の歌」の部分もこの時期に既に演奏されています。ハンゼンはこの頃から第九の全曲を演奏したいと考えていたのかもしれません。

歓喜の歌

ここで第九について簡単におさらいします。ベートーベン(一七七〇～一八二七)が最後の交響曲である第九番の作曲に本格的に取りかかったのは、板東での日本初演の一〇〇年前、一八一八年です。中断をはさみ一八二四年に完成、ウイーンでの作曲者自身の総指揮による初演は大喝采を浴びましたが、それは新作交響曲への賞賛ではなく、大作曲家が人々の前に姿を見せたことに対する敬意の現れだったようで、この時点では一般の聴衆どころか専門家にも真価は理解されていなかったと言われています。それは、この曲が当時の常識からかけ離れた大規模で複雑なものだったためです。第八番までの交響曲で様々な試みを重ねて交響曲を貴族の楽しみの音楽から民衆のものへと改革していったベートーベンは、最後の交響曲に至って初めて人間の声を取り入れ、言葉としてメッセージを発信しました。

第四楽章の「歓喜の歌」は、シラーの頌歌(神への讃歌)にベートーベンが改変を加えたものです。極めて単純に解釈すると、地上では喜びも苦しみもあるが、大きな困難を乗り越えて天上の理想の楽園に至るとすべての人に等しく永遠の幸福がもたらされる、という感じです。一方、「よろこびの歌」として知られる「晴れたる青空ただよう雲よ・・・」という日本語の訳詞は明るく平和な雰囲気で、シラーの詩とは異なるものですが、小学校の音楽教材として和訳された経緯から、苦難を乗り越えてたどりついた楽園の雰囲気を、宗教の異なる日本人に、しかも子供にも理解できる平易な言葉で表現したものと考えればよいのかもしれません。

シラーの詩はフランス革命の少し前に発表され、神への讃歌の形をとりながらフランス革命の理念である自由・平等・友愛の精神を歌っているようにも受け取れます。革命前夜のヨーロッパ各地で熱狂的に支持されたこの詩は、人々にはまさに革命への讃歌のように響いたことでしょう。青年時代にシラーの詩に傾倒したベートーベンが後に第九を作曲した頃には、既にナポレオンが没落して貴族階級が復権し、自由主義が弾圧されていました。貴族を嫌う自由主義者ベートーベンが表現したかったのは、自由で平等な社会への渇望と友愛の精神だったのでしょう。第九を歌っていると、「すべての人々はみな兄弟とな



第九を指揮するベートーベン像および友愛の花コスモスと鳴門市ドイツ館

る(Alle Menschen werden Brüder)」という一節が特に強調されていると感じます。ここから人類の平等や友愛、世界の平和などの理念を読み取ることもでき、それがこの詩に普遍性を与えています。その結果、第九は祝祭から鎮魂までのあらゆる場面で特別な音楽として演奏されています。板東のドイツ兵たちがこの曲を選んだのも、戦後の交流復活で第九が重要な役割りを果たし人々の共感を呼ぶのも、劇的な音楽に乗せて歌われる自由と平等の精神や平和への思いを想起させる歌詞によるところが大きいと思われます。

日本初演

一九一八年六月一日、板東俘虜収容所に移ってさらに活発な演奏活動をしていたハンゼンと彼のオーケストラが第九の全曲を演奏しました。映画「バルトの楽園」では、日本人を招いて野外で第九を演奏するクライマックスシーンが感動を呼びましたが、実際の初演は室内で捕虜たちのために行われたそうです。しかし、翌日に同じくハンゼンのオーケストラが徳島市で演奏会を開き、多くの日本人が聴いたことが記録に残っています。曲が第九ではなかったとはいえ、映画のシーンはまったくの作り話ではないと言えます。

ラジオもなく蓄音機も普及していない時代のことで、この日本初演は一般の人々に知られることはなかったようです。後に日本初のレコード評論家となる野村胡堂(あらえびす)氏が当時勤めていた新聞社で初演を知らせる原稿を見て、聴けなかったのを悔しがったという逸話を根拠に、新聞で報道されたとも言われていますが、真偽は不明です。長い間、日本初演は一九二四年に東京音楽学校(東京芸大)が行ったとされてきましたが、現在では収容所で捕虜たちが発行した新聞が翻訳され、演奏会プログラムも発見されて、板東での日本初演が裏付けられています。

友愛の花

戦争終結後、一九一九年末から捕虜が順次解放され、板東俘虜収容所は役目を終えました。第九の日本初演どころか、ドイツ兵たちが徳島や板東で暮らしたことさえも、次の大戦へと向かううちに忘れられていきました。第二次世界大戦後、引揚者住宅に転用された板東俘虜収容所に住む高橋春枝さんが、ある日草に埋もれた墓石のようなものを見つけました。古くから住む人々に尋ねてドイツ兵が仲間たちのために作った慰霊碑であることを知った春枝さんは必死の思いで日本に引き揚げてきた自分の体験と重ね合わせて人ごとは思えず、見知らぬドイツ兵への供養として清掃と献花を続けました。地域の人々も「ドイツさん」との交流を懐かしく思い出し、さやかな墓守から徐々に共感の輪が広がりました。春枝さんが慰霊碑を見つけてから一三年後、板東を訪れたドイツ大使と総領事が春枝さんに感謝の言葉を述べ、後に帰国した大使の働きかけもあってドイツと鳴門・徳島との新たな友好の歴史が始まり現在に至ります。

春枝さんのご子息高橋敏夫さんが作った詩に当地板東の新川清さんが曲をつけた「友愛の花」は、祖国に帰れなかったドイツ兵を悼み、友愛の心をコスモスの花で表現した美しく感動的な歌です。鳴門市と姉妹都市になったリューネブルク市との交流などの日独親善交流に際して、第九とともに友好の象徴として歌われています。

エンゲル音楽教室

ここまで第九とその日本初演を行ったハンゼンに注目しましたが、板東俘虜収容所にはもう一つの楽団がありました。丸亀から移ってきたパウル・エンゲルのオーケストラです。エンゲルは上海のオーケストラのバイオリン奏者でしたが、青島の戦いに参加して捕虜となり丸亀に送られました。丸亀収容所は徳島と比べると多少制約が厳しかったようですが、丸亀保養楽団と名付けたオーケストラを結成しました。板東ではエンゲルオーケストラとして再出発し、ベートーベンの田園交響曲など名曲の数々を演奏しました。そればかりでなく、第九の日本初演で注目されるハンゼンよりもエンゲルの方がはるかに深く徳島の人々と交流しました。最後にそのことを紹介します。

板東俘虜収容所でドイツ兵たちが音楽の演

奏をしていることが新聞に載り、興味を持った徳島市の洋装店主田処栄治さんが友人の立木真一さんらを誘って見学に行きました。十数キロ離れた板東まで自転車で何度も通うちに、次第に演奏に心を引かれるようになった青年たちは、ドイツ兵から楽器を学びたいと松江所長に申し出ました。それに応えた松江所長の計らいでエンゲル音楽教室が開かれました。エンゲルは、「このようなことが今の時代にできるのは貴重だ。だから私も一生懸命努力する」と語って、熱心に指導をしたそうです。エンゲルに学んだ青年たちにより、この時代には大都市にもなかった市民オーケストラが誕生しました。それが「徳島エンゲル楽団」です。ドナウ川のさざなみや荒城の月、美しき天然などを練習し、婦人会などに招かれて演奏したそうです。写真は立木さんの自宅、テレビドラマ「なっちゃんの写真館」で知られる立木写真館で撮影されたものです。当時の青年たちの熱意が伝わってきます。

大正時代の徳島エンゲル楽団
（中央がパウル・エンゲル氏）

よみがえるエンゲル楽団

田処さんや立木さんたちの楽団はドイツ兵たちが去った後もしばらく続きましたが、指導者がいないことやメンバーの生活の変化などの理由で自然消滅したようです。戦中の困難な中での友好的交流の歴史が忘れ去られないようにと、平成に入ってから徳島エンゲル楽団を復活させようという動きが起こりました。徳島エンゲル楽団ゆかりの立木写真館や徳島収容所があった徳島市富田地区で長年教育や文化振興に尽力してきた佐藤義忠さんの呼びかけで、当時の徳島エンゲル楽団やドイツ兵楽団の演奏を再現する新しい徳島エンゲル楽団が活動を始めました。年に一回「エンゲル・松江記念市民音楽祭」と題した演奏会を開催しています。宣伝不足のため地元でもあまり知られていませんでしたが、筆者が数年前から合唱メンバーとして参加するうちに、この意義ある活動を広く知ってもらいたいという思いが強くなり、二〇一一年から徳島エンゲル楽団のホームページとブログで情報発信を始めました。その結果、遠方から演奏会に来てくれる人も現れ、また入場者も増加傾向にあるなど、次第に効果が現れつつあります。さらに、若い世代への継承を意識して、徳島大学の学生団体との共演の準備を進めています。

二〇一三年六月二三日には、世界的バイオリニスト奥村智洋さんを独奏者に迎え、ハンゼンが徳島で日本初演し、エンゲルも板東で演奏した名曲、ベートーベンのバイオリン協奏曲をメインとして、徳島大学交響楽団との合同編成でエンゲル・松江記念市民音楽祭を開催します。また、筆者が学生時代に所属した合唱団、徳島大学リーダークライスとの演奏会も企画しています。

ドイツ兵たちが徳島にやって来た一九一四年から一〇〇年という節目が目前となりました。彼らが自由と平和を求め祖国への望郷の思いを込めて演奏した第九が示す友愛の精神を実践した一〇〇年前の人々に敬意を表すとともに、大正時代の青年たちの進取の気風を称え、現代の若者たちとともに音楽を楽しみながら徳島が誇る友愛の心を伝えていこうと思います。

現代の徳島エンゲル楽団
（2011バルトの庭演奏会）
http://engeltokushima.jimdo.com/